

評価指標に関するコメント

松本 邦愛

事業評価の流れ

1. 達成目標の設定
 - ・現状の理解：「問題」をどのように発見するか。発見する主体はだれか。
 - ・達成目標の設定：目標は適切か。達成までの期間はどのくらいか。測定可能か。
 - ・評価指標の設定：「何」を評価するのか。成果かプロセスか。
2. 事業評価
 - ・データ、実績の収集・整理：評価のためのコストはどのくらいかかるか。誰が負担するのか。
 - ・事業評価：指標の評価主体は誰か。
3. 評価
 - ・評価組織：即効性のない事業についてどのような評価基準を設けるか。

評価指標の作成

1. 定量評価、定性評価（第1軸）と成果指標・活動指標（第2軸）
 - ・他の軸として、評価コストの高低、効果の即効性・遅効性が考えられる。
 - ・評価コスト：仮に定量評価で成果指標が測定できても、評価自体にコストがかかりすぎるものは評価指標としては不適當。
 - 例：事業の他業種への波及効果。マクロ的な指標、等。
 - ・効果の即効性・遅効性：即効性のあるものは成果指標が望ましく、遅効性のものは活動指標での評価しかできない。
 - 即効性の例：分煙達成率向上、食中毒予防等のマニュアル完全実施、等
 - 遅効性の例：安全文化の普及、商店街の活性化、知識の普及、等
- ⇒ **プロセス評価の重要性**
2. 比較可能性
 - ・科学的な評価を目指すのであれば、比較が必要。
 - ・全国指導センターが取り扱う個々の事業に関しては比較対象の設定が困難。
 - ・都道府県指導センターの扱う事業に関しては、都道府県間比較などが可能。ただし、比較に関しては十分な工夫が必要。

事業評価の方法に向けて

- ※事業評価の方法を議論するためには、一度今までにあった事業そのものを点検し、事業の特性等を類型化する必要があるのではないか。
- ※既存データにおいても問題の発見をすることは可能である。モデル事業を行う前に、何が問題となっているのかを事業者ではなく、評価組織が十分検討する必要があるのではないか。